岡山県立博物館だより

25号
2月1日
1986

確固たる郷土自慢の一つに

館長 友野澄雄

年末になると，新聞に1年を回顧する記事が掲載される。ここ数年特徴的に思えることは，埋蔵文化財の発掘調査に関する回顧記事が掲載されることである。昭和60年の場合はきわだった印象を受けた。

新聞が社会の鏡であるならば，古代史ブームの反映であろうか。

発掘調査された遺跡・出土品について，新聞に派手に扱われたものが価値が高く，地味に扱われたものが価値が低いということでは決してなかろう。その日のニュースの量によっても，取り扱いが大きくなったり，小さくなったりの場合もあろう。しかし，一般の人々の評価は紙面の大小によって左右される傾向は強い。研究者の間でも，個々の遺跡についての評価には大きな差のあることは新聞紙面からも伺える。

珍しいものが出そうだから発掘するということもあろうし，道路工事をしていたら，びっくりするほどのものが出土することだってある。

真実を求めて発掘調査をしても，何も出てこなかった場合にはほとんど報道されない。しかし，発掘を担当した研究者の姿勢は高く評価されてよいと思うし，学問的には非常に重要なことだと思う。

時に「あなたの博物館にはええものがあるのか」との質問を受けることがある。私はその時，質問者の「ええもの」の意味はどんな意味での「ええもの」かと思う。例えば「銭になるもの」という意味なのか。それとも「日本の歴史を考える上で欠くことのできないもの」，あるいは「美的鑑賞にたえうるもの」等々，幾通りにもとれる。しかし，私は「銭になるかどうかわかりませんが，教科書にのっているものはありますよ」と答えることにしている。

昨年10月，開館15周年記念展「－古代のロマンをさぐる－筑紫・吉備・大和の遺宝」を開催した。それは農耕社会の形成期から巨大古墳が築造される時代までの筑紫・吉備・大和の比較展であった。

筑紫と吉備，吉備と大和とはどんな関係にあったのかを追求するものであった。

記念展の図録の解説を執筆した本館の高橋護学芸課長は，吉備と大和の関係について，次の3つのケースが考えられると集約している。

「①大和の首長が吉備を征服し，吉備に対する宗主権を確立した。……②①と反対に吉備の首長が大和に進出し古墳を築いた。……③大和と吉備が同盟関係に入り，周辺の地域に対し，優位性を確立した。

いずれにしても，大和と吉備の間に首長の葬送儀礼という重要な儀式で結びつきが成立したことと，巨大な前方後円墳の築造が開始されたことには密接な関係があり，それによって，日本の社会は，統一国家の形成に向けて動き始める」と。

まとめの部分のみを引用して誤解を受けては困るが，一つ一つの遺跡，一つ一つの出土品をたんねんに検討した上でのまとめである。

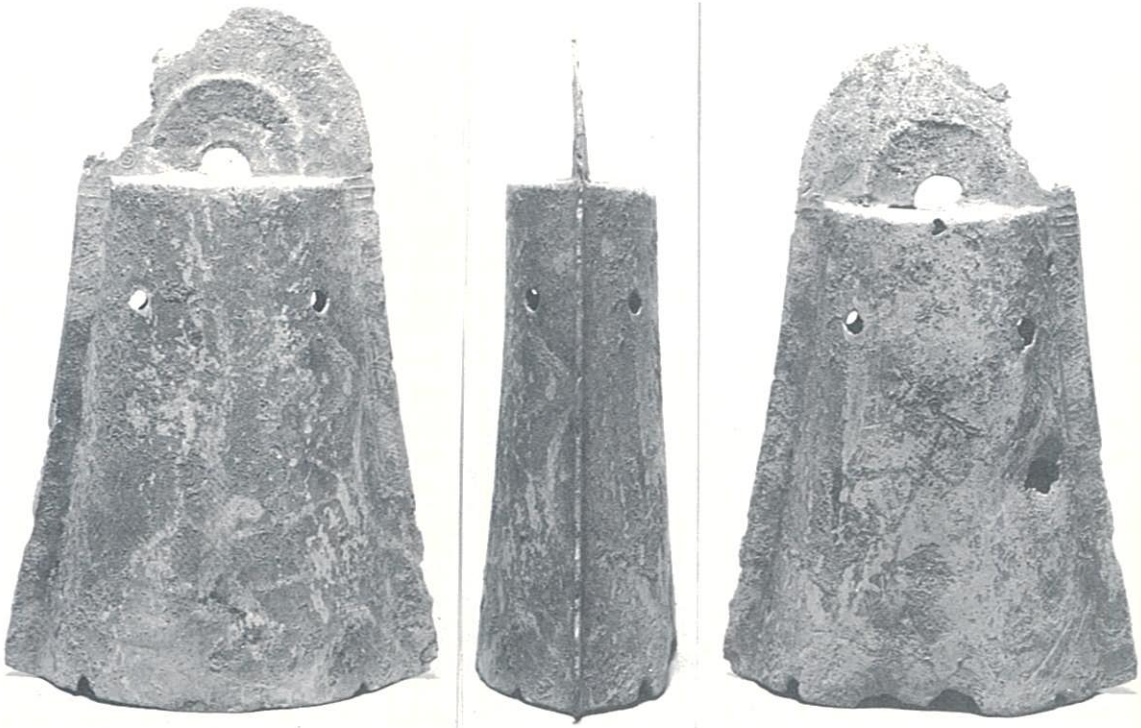
今年1月には奈良の研究者によって，吉備と大和とのつながりを解明するうえで重要な発見がなされたと，新聞は報道している。高橋課長の見解の延長線上のものである。今後，発掘調査が進み，検討を重ねていくことによって，徐々に解明されることであろう。

昨年4月，岡山市雄町で銅鐸が発見された。関係者の御好意により本館に寄贈されることになった。このように突如として出土する遺宝についての解明は急がなければならないが，簡単に結論に達するということにはなるまい。それは，日本の古代史そのものの究明につながっているからだ。

新しい年を迎えたが，調査研究に飛躍はない。一歩一歩確実な歩みを続け，確固たる郷土自慢の一つとしての県立博物館でありたいと願っている。

開館15周年記念展より

史料紹介



雄町遺跡出土の銅鐸

学芸課長　高　橋　　護

この銅鐸は，昨年の1985年４月４日，岡山市雄町 137番地の水田から，土地所有者の岸本郁栄氏によって発見されたものである。銅鐸は，文化庁より発見者に譲渡されたうえ，このほど本館に寄贈された。

銅鐸の出土した地点は，沖積平野の中央部に位置し，山陽新幹線建設にあたって，大規模な発掘調査の行われた雄町遺跡に含まれる場所である。

発見は，全くの偶然であり，岸本氏が鯉のぼりの柱を立てるため，庭さきの水田を掘り下げたところ，地表下40～50センチの所で，この銅鐸を掘りあてたものである。

その後，６月上旬に鯉のぼりの柱を抜きとる際に，銅鐸の埋没していた位置や，土層の状況を確認することができた。銅鐸は，通常の埋納状況とは異なり，鰭を水平にした姿で埋まっていた。掘さげられた柱穴が小さいため銅鐸の埋納拡を確認することはできなかったが，微高地基盤層に掘り込まれた複数の穴が存在しているように観察された。包含されていた土層は，暗褐色有機土層であり，雄町遺跡では，弥生時代から古墳時代初期にわたる時期に特有の土層である。掘りあげられた土中には，弥生土器の細片が包含されていたが，いずれも細片であり，銅鐸とともに埋納されていたと考えられるような土器はない。

発見された銅鐸は，４区画袈裟襷文銅鐸１個であった。鋳あがりの湯まわりは良くなく，表面の文様は，全く鋳出されていない部分がかなりひろがっている。大きさは，現在高31.3センチ，推定高31.6センチ，身高23.4センチを測る。説明の都合上，埋没時に上を向いていた面をＡ面，下向きの面をＢ面と呼ぶことにする。Ａ面とＢ面の関係は，鈕，鐸身を通じて鰭の部分ではよく合っているが，鈕では，Ａ面に比べて約４ミリＢ面側が高い。この高低差は舞の上面の位置にも関係したようで，舞の下がったＡ面側の舞は湯まわりが悪く，鋳かけを行ったようであるが，なお大きく穴が開いている。鐸身部内面の様子では，舌の当たりの痕跡は認められない。また，銅鐸に舌を付けたまゝで埋めた形跡はない。鐸身部の下部は，掘り出された際の鋤の当たりによる変形もあるが，それだけでなく水平に埋まっていたため，土圧により本来の形より少し変形しているようである。

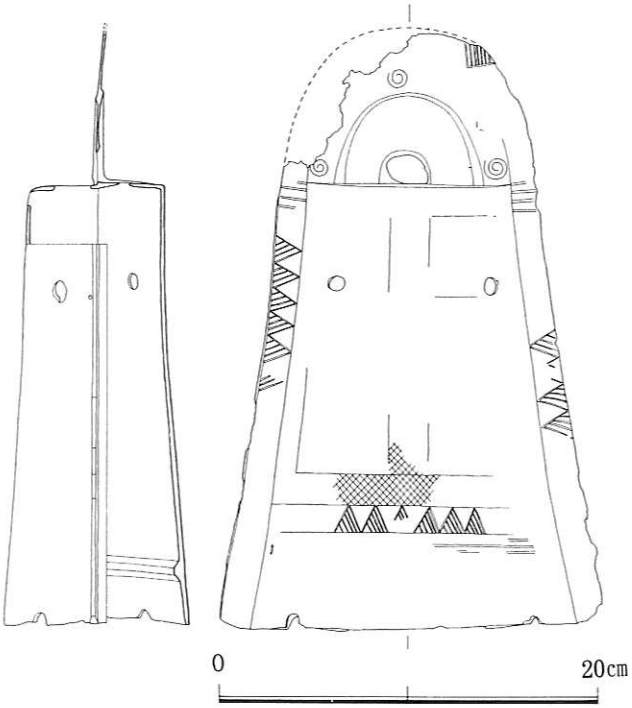
文様は，Ａ面で不明な鈕の文様構成を除き，ほゞ両面とも同工であるが，細部は相違している。Ａ面の袈裟襷文は，一部で観察することができるのみであり，ことに右半面では全く鋳出されていない。上端，中段，左側の袈裟襷帯は

巾15ミリ，中央の縦行帯は，巾22ミリ，下段は巾17ミリを測る。袈裟襷文の下には，鋸歯文帯があり，鋸歯形は右下がりの斜線でうめられている。文様帯の下端には，３条の横線かあるが，表出された横線は鋸歯文帯や袈裟襷帯の区画線に近い細線であり，鰭には及んでいない。

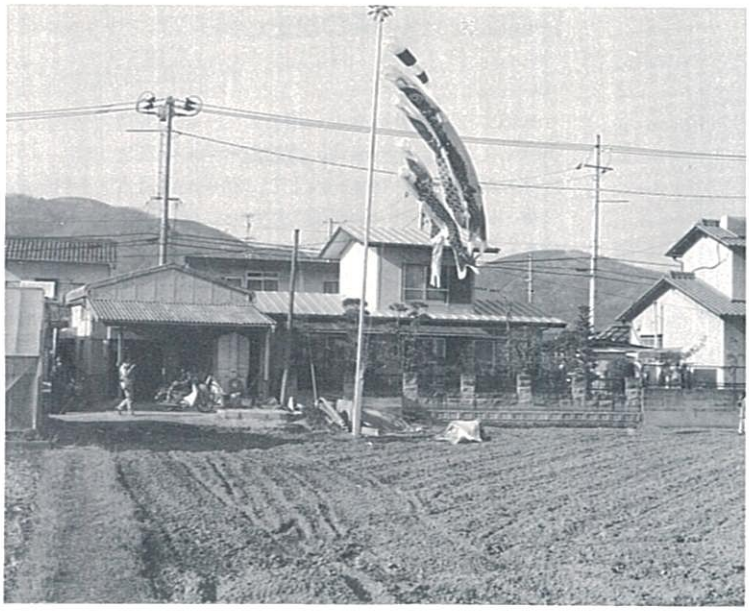
鰭ではA，B面とも舞の横の肩の位置に４条の横線がみられるが，その先端は鰭の端で止まり，環や突起をつくっていない。

鰭には，全面に内向鋸歯文が描かれており，A面左側では，右下がりの，右側では左さがりの斜線でうめられている。鈕では，外縁に左側鰭から続く内向鋸歯文がみられるが，その他の文様は，表面の剥離もあってよく識別できない。

B面では，鐸身の上半の鋳上がりが悪く，上端右半，中央の縦行帯上半には，鋳造後，ごく細い線で切り込まれた袈裟襷文が補刻されている。鐸身右端は，A面と同様に全く文様を失っている。B面では，鰭の鋸歯文をうめる斜線の傾きがA面と反対になっている。鈕の外縁に続く鋸歯文は，A面と同様に，左辺の鰭から続き，斜線の傾きの変換点は右肩にある。鈕では，鋸歯文帯の内側に渦文帯があり，かすかに渦文をみることができる。



雄町銅鐸実測図



銅鐸出土地

ほゞ形を止めている３つの渦文は，いずれも同一方向に巻いた渦文であり，上部にみられる渦文が，巻き返し渦文でないので，連続渦文であったとしても，中央で二分されていたようである。中央で二分される連続渦文の場合，左右の渦文が対称図形を描くように，逆向きの渦文を描いた例が多いが，この銅鐸の渦文ではそうなっていない。しかし，現状でうかがうことのできるのは，わずかの渦文であり，本来，整然とした連続渦文が描かれていたか，否かは疑わしい。

銅鐸の形状，文様構成など，細部の違いはあるが，安仁神社銅鐸として知られる銅鐸に近いものである。

昭和61年度事業のお知らせ

○特別展「日本の古窯」

10.25～11.24

平安時代から室町時代に至る日本の代表的古窯を県外10か所（渥美・常滑・瀬戸・美濃・越前・加賀・珠洲・信楽・伊賀・丹波）と岡山県2か所（備前・亀山）をとりあげ，それぞれの焼物の特質や軌跡を全体との比較の中で見てゆく。各々の古窯はお互いに影響し，また競合したり，あるいは独自性を守ったりしながら，それぞれの消長のドラマを形成し，日本全体のレベルを引き上げ，庶民の生活を豊かにするとともにそれぞれの独特の美をかもしだしてきた。そうした美と流れを展観したい。

岡山県では，全国的にみて，あまりにも強大な備前焼が存在したため，他地域の古窯に対する一般的関心が決して高いとはいえなかった。

今回，他地域の主要な古窯を一堂に展観し，備前とその近隣の焼物がどのように存在していたかを知ることは，備前を側面から見ることにもなるし，焼物だけでなく，文化の時代的特質や流通経済にまで関心をもっていただけるのではないかと思う。

珠　洲　　秋草文壺　　石川県立郷土資料館蔵

講　演　会　東京国立博物館陶磁室長
矢　部　良　明　氏
（　演　題　未　定　）

○博物館講座

5月～6月　　本　館　講　堂

わが郷土岡山県には，多くの貴重な文化遺産が伝えられている。この講座は，県民の皆さんにこうした文化遺産を正しく理解し，継承していただくため，本館が，開かれた博物館を目指して行う活動の一つで，昭和61年度で10回目となる。講座のテーマは「岡山県の歴史と文化」で，講師は本館学芸課職員が中心となるが，数名の外部専門家を招いて講座内容がより幅広く，質の高いものになるよう配慮している。また，可能な限り本館所蔵の実物資料を活用して学習することにしており，昭和60年度は定員の2倍以上の応募があるなど，受講生の皆さんからは親しみやすい歴史講座であるとの評価を受けている。

○巡回展「岡山県の歴史と美」

新見市総合福祉センター

本館では，普及活動の一環として，県内各所で巡回展を実施している。巡回展は，博物館事業の一環として，「岡山県の歴史と美」をテーマとし，館蔵品の考古・美術・古文書・民俗・刀剣・陶磁器の中から，開催場所にふさわしいものを選定し紹介するものである。

昭和59年度まで10年間にわたり14の会場を巡回し好評をいただき，本館を訪れにくい遠隔の地での開催という当初の主旨が薄れてきたため，隔年となったが，昭和61年度はに新見市総合福祉センターで開催する予定である。

岡山県立博物館だより　　No.25
発行日　昭和61年2月1日
発行者　岡山県立博物館
館長　友野澄雄
岡山市後楽園1－5
☎（岡山）72－1149